

トランス
ミン
千里
明月

omaera doredake
orenokoto suki dattandayo!

OMA-DORE!

お前ら
どれだけ俺のこと

好き!

だったんだよ!

試読版 くらら編

第四節 舞咲くららは立候補する

「はあ……。なかなかうまくいかないものですね」

土曜日の半日授業を終えて帰宅した白雪しらゆきは、自宅のベ
ツドで項垂うなだれていた。

この都市の名家——月ノ瀬つきのせの名を冠する以上、だらし
ない姿は晒さらせない。

ソファーでごろ寝しながらレディコミやファンタジー
小説を読むとしても家の中だけである。

自分の隙すきは、弱みは見せない。

月ノ瀬白雪はそう心がけて生きている。

しかし、それが自分に芽生めえばた恋心を成就じょうじゆさせるに辺り、かなり面倒な障害となっていた。

「ですが、まだ二の矢があります」

失恋を自白させ、受け入れるという形で好意を伝える方法は失敗したが、そう遠くないうちに隆人は白雪を頼ってくるはずだ。

「——なぜなら先輩せんぱいには、他に恋人のフリをしてくれる知り合いなどいないのですから」

一応はそこそこの外見をしている隆人だが、白雪が見る限り、中学時代に浮いた話題はないようだった。

つまり隆人は——恋愛脳は持っているものの、恋愛

すること自体に恐れがある。あるいは女ではなく男が好き……考えておいてなんだが、後者の可能性はないものとした。

生徒会長という例外がたまたま現れ、気の迷いなのかそちらになびいたが、隆人の恋人に収まるような人間はすぐに現れない。

そう、白雪以外には……。

（ということは、必然的に先輩はわたしを頼るしかないわけですよ）

ふふ、と周田から見れば優雅な笑みを白雪は浮かべ目を伏せる。

隆人が中学時代、割と社交的であるかのように振る舞

っていたことは知っている。

そして、偶然にも隆人が生徒会長と本当につき合っているのかを確認しようとして張っていた過程で、白雪は次の情報を入手している。

連中と合コンという名のプチ同窓会に恋人を連れて行くこと宣言してしまったからには、できる限りその言動に寄せようという心理が働くはずだ。

実際、白雪の推論は当たっていた。

が、隆人が恋人役を捜すにあたり、頼れる者は自分しかいない——というのは、白雪が無知であるが故の失策であった。

『正常性バイアス』という心理学用語がある。

人は予期せぬあらゆる事態に対し、鈍感であろうとするという心理のメカニズム。

越えてはならない一線を越えるまでは——身の回りで起こりうる危機を、あえて危機として認識しないという性質である。

心配のし過ぎによる不必要な精神ダメージを避けるための鈍感力の防衛機構が働き、白雪はしばらくの間、他の誰かに隆人が取られることなどないだろうと楽観したのだ——が。

たまたま天気予報を見忘れていたときに限つての傘の持ち忘れしかり。

意識していないときに限つてなにか起こるのも、わり

と起こりえる事例といえた。

『本当ですか、お嬢様。彼も年頃の男性なのですから、
ここらで横からかつさらわれないうう、ぐいっと押して
おくべきでは？』

ラインで呟つぶやいた白雪のメッセージに、ひとりの少女が
助言する。

彼女の名は日ひ隠かく華し音かのん。

白雪の侍女じしよであり、白雪の本当の姿を知る、数少ない
身内であった。

もどかしくなつた白雪は、コールをして華音と通話す
る。

「華音ですか？ 前にも言ったでしょう？ わたしから

押すわけにはいかないんです。そうすれば、先輩に対して男性の魅力は感じていないと言ったのに、すぐさま前言を撤回するただの尻軽女しりがるになっってしまったんでしょう？」

改めて自らの意志を侍女に示し、

「——っていうか、私が唐突とうとうにそんなこと言い出したら、実は先輩に興味なかったってというのがただの強がりだったという話になっってしまったうじやないですか!? そんなこと恥ずかしくて言えるわけないでしょう！」

「随分とひねくれまくった素直すなおさですね」

そう答える侍女の、呆れた半目はんめが目に浮かぶようである。

「お嬢様の自由ですけど、私は忠告しましたから。あと

で泣きついてきても知りませんよ？」

「それには及びおよびません。昔からあなたは、わたしのことになると過保護ですよ」

不敵な声音こわねで返す白雪に対し、華音はさらりと言った。
「そうですね。先日私に泣きついてきたことが記憶に新しいのですが」

「あんなこと、そうそうありませんから！ まあ、先輩がわたしに声をかけてくるタイミングを、見逃さないようにしないとですね」

侍女の皮肉を聞き流し、白雪は得意げに微笑ほほえむ。

昨日の戦略こそ不発に終わったが、白雪とてタダで転んだわけではない。

次の作戦への布石は打っているのだ。

「わたしの策は、既にこの手中にあるのですよ」
—連絡先の交換。

白雪が隆人を同じ部活へ勧誘したのは、その目的もあったのだ。

独特な活動内容とはいえ、部活は部活。

共有するSNSのグループを作り、そこに隆人を加入させた。

副部長という立場も味方し、昨日の別れ際に、ごく自然に切り出すことができた。

「これで、秘密の抜け道は開通しました。先輩が恋人役の確保で困ったとき、わたしをいつでも頼ることができ

るわけです」

しかも、隆人のライングループには、他の部員はまだ登録されていない。つまり——他のメンバーに知られる危険がないため、白雪にも相談しやすはず。

時間と機会。

ふたつの制約を、見事に白雪は取り払ったのだ。

「くるといいですね。連絡」

「くるに決まっています。もう勝ったも同然です」

などと、華音の投げやりな問いに上機嫌な白雪だった
が——。

（っていうか、めちやくちやドキドキします……！ 先

輩からラインメッセージがくるかどうか……！）

顔を赤くして汗をかき、息を荒らげるときに緊張して
いた。

連絡先を得ただけで、八割がた目標を達したと思って
いたが、なまじそこからプレッシャーがかかることを今
知った。

（なるべく早く連絡をするんですよ。わたしにも心の準
備がありますからね）

「……はあ。困ったものです」

電話でもそわそわを隠せない主の心情を見抜き、侍女
の華音は呆れたのであった。^{あき}



「うおおおおお……。マジでどっしょしよう……。！」

一方、バイト帰りで自宅のマンションの階段を上っていた隆人も、スマホを握りしめたまま悶絶もんぜつしていた。

画面に映るSNSのチャット。

ふたつのグループを指が交互に叩き行き来している。

ひとつは、中学時代からのつき合いである、同窓会のグループ。

もうひとつは少し前に入った天文部のグループだ。

先ほどの歩道から、その画面を睨にらみつつ隆人はうめいていたため、傍はたから見ればアブナイ人である。

（わざわざ俺おれを部活に呼び、ラインまで誘ってくるくら

いだから、白雪からの印象は悪くないはずだ……！）
もちろん。恩を着せ、部内の使いぱしりを命じられた
という形ではあるが、それでも引き受けてくれる可能性
はあるだろう。

つい昨日、倉敷女史によって隆人が既に生徒会長にフ
ラれたという事実は認知された。

明日に迫った中学時代の同窓会——と、名のついた
合コンに対し、白雪に助けを求めるときか迷っていた。
（いや——中学の同級生連中相手にそこまで取り繕つくろっ
てどうする？）

一度基本に立ち返り、冷静に思考し直してみる。
素直に『できたばかりの彼女にフラれた』と、事実を

告げればいいだけではなからうか？

（やっば、ダメだ！）

が、脳内でその状況をシミュレートした結果、それは避けるべきだと判断する。

取り繕っていた軽い陽キャという隆人のキャリアが崩れ去るのは今更仕方ない。

しかし、合コンという状況において、もっとも厄介な問題が起こってしまうのである。

——『楽しい場の空気の破壊』。

それをしたものは、二度と集まりに呼んでももらえないどころか、永劫陰口えいごうかげぐちを叩かれることになる。

隆人自身は連中とつき合わない方が楽なのだが、そう

いう空気を後々作つたと忌避きひされるのは嫌なのだ。
幼少期に陰口を叩かれたトラウマが再発するからである。

具体的になにがまずいのかというと、隆人が『つまり
ない嘘うそをついた』ことになつてしまふからである。
最近恋人ができたというネタと、その彼女を早速連れ
て行くという約束をし、それで相手は盛り上がった。
その彼女に速攻でフラれたとなれば、笑い話や慰めら
れる空気になるどころか、隆人が適当な嘘をついたと思
われるだろう。

そんな早くフラれる方が嘘くさいからだ。
そのいたたまれない空気にずっといなければならぬ

苦痛を思い描くと、隆人は顔を押さえて悶絶もんぜつした。

「……く！」

やはり、貸しを作るのを承知で、白雪に頼るしかない
だろうか？

美人で同じ学園に通う少女、という項目は十分に
満たせている。

あとは、白雪がOKしてくれるかどうかだ。

階段を上って、二〇二号室の鍵を差し込む——と、
ある違和感に気づいて隆人は嘆息たんそくした。

鍵が開いているのだ。

といつても、隆人が戸締まりを忘れたわけではない。
空き巣が入ったわけでもないだろう。——たぶん。

隆人にとつてはお馴染みのちんにゆうしゃ闖入者がそこにいるのだ。

「おーい、くらら！ 鍵が開きっぱなしだぞ！ 戸締まりはどうした!?」

玄関を開けて靴を脱ぐなり、大声で帰宅を告げる。やや足早に廊下を歩き、自室のドアを開けると、想像と寸分違わぬ光景が隆人の目に飛び込んできた。

「ちーっす。おかえりー。じゃなくてだな。ただいまくらい言えよなー？ 行儀ぎようぎがなっていないぞ、リユート」

人のベッドにうつ伏せに寝転がりながら漫画雑誌を勝手に読む少女は、軽く首だけを動かして隆人を一瞥いちべつし、トレードマークの八重やえ歯ばを見せた。寝ながら菓子を食うな。



やや荒っぽい言葉遣いだが、不思議に明るい独特なア
ニメ声のおかげで、無邪気な子供が偉ぶっているような
響きに聞こえる。

癖毛のツインテールが、百四十センチ前半のちっぽけ
な体軀たいくと、幼い顔立ちにベストマッチしている。

その小生意気な姿はどう見ても人の部屋に入り浸るびた小
学生の妹めいか姪めいのようだが、れっきとした十七歳の『年
上』である。

隆人の幼馴染み——『舞咲まいさきくらら』。

かつては隆人の隣の家に住んでおり、小学校時代は仲
のよい友人だった少女だ。

中学時代は、両親の仕事の都合で海外に行ってしまった

ていたが、一年前にこの町に一家で戻ってきたのだ。しかし、実に四年ぶりに再会して、隆人は驚いた。小学生当時と、舞咲くららの外見が変わっていないかったのだ。

いや、むしろ隆人が思春期に入ったせいか、昔よりも幼くなっているのではないかと疑ってしまっただほどだ。

下手をすると、制服もやや小さく、小学生が高校生のコスプレをしているような背伸び感が漂ただよっている。

「人の行儀を指摘するような姿には見えないんだが……？」

「んー？ 確かにこのままじゃ制服がシワになるな。

——よっつと」

くららは隆人に指摘されると、ゆっくりとベッドから起き上がり、腰かける。

横が縦になってもやはり小さい。

だが、前にはデカくなつた。つまりは巨乳なのである。具体的なサイズは知る由よしもないが、たぶんバスト90は下回らないだろう。

反射的に目が行きそうになるが、意外と相手の女子は視線に気づいているという噂うわさを聞いたので注意が必要だ。

「いや、制服のシワどうこうじゃなくて、俺の部屋で勝手にくつろいでることを指摘したんだが——」
などと、言うだけ無駄なのは、長いつき合いでよく知っている。

「っさいなー。ケチケチすんなよ。昔はいろいろ面倒見てやったろー？」

長い棒状の菓子をくわえながら、ふとももの上で開いた漫画雑誌に目を落とす話すその姿には、行儀の欠片かけらすらも感じられない。

「っていうか、よく見たらその菓子、確か昨日俺が買ったきたのじゃねえか……！」

不法侵入に窃盗の罪が加わった瞬間だ。

いや、まずは偽証罪ぎしやうざいからだ。罪状がどんどん増えていく。

「それにな。俺がいつお前に面倒を見てもらった？」

「それが年長者に対する口の利き方かー!? 一度お灸きゅうを

据えてやる必要があるな！」

くららはムツとして漫画雑誌を閉じ、上目遣いで睨みつけてくる。

が、怒ったところで怖さの欠片もない。

むしろハムスターが臨戦態勢をとったような可愛さすら感じられる。かわい

しかし、隆人は容赦しなかつた。ようしや

「——で、昔行つたプールのあとで貸したアイスの代金は？」

「……………」

ピタッと、石化魔法をかけられたようにくららの動きが止まる。

「修学旅行のお土産代みやげとして行く前に俺から借りてった小遣いの返却は？ レンタルビデオを五回も代わりに返しに行つてやつた件は？ 俺の誕生日に部屋から持つていったプリンの行方ゆくえは？ そういえば一切手をつけてなかつた夏休みの宿題をラスト一週間で死ぬ思いをして手伝つてやつたのは誰だと——しかも俺は年下なのに」

「だあー。わかつたわかつた！ わちが悪かつた！ ま——いいだろ、お前とわちの仲だ。その無礼な口の利き方は許してやらんでもない」

両腕を組み、あぐらをかいてくららは告げる。

「それだけの後ろめたさがあつて、なんでまだ上から視線でいられるんだよ……」

このポジティブハート。

もとい凶々しさがくららの武器である。今すぐ捨てる
と言いたい。

どうでもいいが、スカートであぐらをかいたせいで
若干^{じゃっかん}パンツが見えそうである。

——しかし、隆人はあえて見ない！

本心と理性の割合でいえば10・0で見たいが、見ない。
もし見ようとしていると「ろが——いや、興味を持
っていることすらくららにバレたら、彼女はものすごく
調子に乗ってくるからだ。

『ほお。リュートはそんなにわちのスカートの中が見た
かったのか？ いいぞ、見せてやっても。だが、あとで

リユートのおばさんに告げ口されたくなかったら、わか
ってるな?』

などと、超絶得意げな顔で絡^{から}んでくるだろう。ウザ
い!

それは——そんな状況は、隆人のプライドが許容で
きない。

たかが一学年——実時間にすればたった半年ほど早
く生まれたただけで、これ以上お姉さんぶられるわけには
いかない。

隆人と舞咲くららは、そういう関係なのであった。
(これで外見が可愛くなかったら、とっくに追い出して
やってるところだ……)

そう内心思っているが、『かわいい』と言うだけで調子に乗られるので□にはしない。

そもそも、何故かここ一週間、くららはまったくこの部屋に寄りつかなかったもので、むしろ僅かに寂しさすら感じていたくらいだ。

「それで、なにしに来たんだよ？」

「今週発売の月刊誌があつたからな。読みに来てやったぞ」

「自分の金で買えっ」

と、いつもの突っ込みを隆人はしつつ、

（もしかして、俺が生徒会長とつき合つたことで、しばらく遠慮してたんだらうか？）

だとすれば、意外と年相応なところもあると見直さねばならない。

（待てよ？）

が、そうと気づいた瞬間、隆人の中に嫌な想像が浮かぶ。

くららは学園の三年生。

生徒会長も三年生で確か同じクラスだったはず。

ということは――。

（まさか！俺が生徒会長と別れたことをもう知っているというのか……？）

白雪のときと同様に、生徒会長という恋人ができたことは一週間前にくららにも話していたのだ。

そのとき、普段からかわれている分、めっちゃや威張^{いば}ってやってしまっていたことを思いだし、隆人は戦慄^{せんりつ}する。

必然的に、くららのカウンターパンチが用意されている可能性が高い。

『おい、リユート。フラれたからってあんま凹^{へこ}むなよ。おねーさんが毎日慰めにきてやるからなー。お茶とお菓子用意しとけよー？ ウエヒヒ……』

などと調子づいた笑顔を浮かべながら告げるくららの姿が、脳裏^{のうり}に浮かんだ。

（ぐおおおおお、ヤバイ！ どうにか切り抜けねば！
しばらくの間、俺の心の傷口に粗塩あらじおをすり込まれてしま
うっ！）

隆人は内心頭を抱えて悶絶したが、現実には予想もし
ない、複雑な状況にあつた。



（——よし、『いつも通りの雰囲気です』のは成功し
たな。最初の関門は突破したぞ！）

部屋の主である隆人に背を向けつつ、少女は内心ガツ
ツポーズを取る。

隆人は知る由よしもないが、舞咲くららはドキドキしていた。

実を言うと、この部屋に一週間ぶりに入るのも、かなりの勇気を要したほどである。

そんなことになるとは、くらら自身思ってもいなかった。

事の発端は一週間前——、隆人から生徒会長という恋人ができたことを告げられた日さかのぼまで遡る。

『カノジョができないうお前ん家に美少女様が来てやっつんだから、ありがたく思えよな——』

ちようど隆人の部屋に遊びに来ていたくららが、いつものようにニヤニヤと弟分をからかったが、その日は反

応が違っていた。

余裕のある大人の態度と寛容かんようさを見せていたのだ。

『悪いなくらら、もうカノジヨができちまつて』

聞いた瞬間、くららは時間が止まったと感じた。

もちろん『嘘だろ？』と強がってはみたが、生徒会長という具体的な相手を出されると、沈黙するしかなかつた。

『どうした？ 魂が抜けたような顔をして、俺に先を越

されたのがそんなにシヨツクだったのか？』

くららの固まりっぷりに、むしろ隆人も驚いたらしく、冗談交じりにそう言ってきたが、

『う、うるっせー！ そんなくらいで調子に乗んなよー！』

三秒後にフラれても、もうここにきてやんないかな
ー！』

若干涙目になっただくらは、小学生のような捨て台詞ぜりふを投げつけて退散するしかなかった。

が、それ以上に衝撃的だったのは、内心ものすごくダメージを受けている自分自身に気づいた点だ。

今までただの舎弟だしゃていと思っていた隆人が、手の届かないところに行ってしまったこと。

いずれはあの部屋に生徒会長が入り浸るようになることを考えると、自分の居場所が奪われた気がして、ガタガタと震えて自分のベッドに潜り込むしかなかった。

—— 『非』 恋愛脳。

イラストの分野において才能を発揮し、歳の近い男とも気安くつき合える性格のくららだったが、自分の恋心に関してには凄まじく疎かだった。

なまじ年下の幼馴染みとして隆人と長く接していた分、気づくのが遅かったのである。

海外からこの町に戻ってきたくらは、週二、三のペースで隆人の部屋に入り浸っていたわけだが、すっかり意気消沈して玄関前でリターンするようになった。

しかし、つい先日生徒会長本人から隆人と別れたという話を聞き、立ち直ったのである。

（これでなー。あのときの一言さえなければ、うまくいったのにな……）

隆人への好意に気づいたのはよいが、それをストレートに伝えることはできない。

何故なら、彼女のことを知らされた翌日に学園で会った際、くららは隆人にこう言ってしまったのだ。

『まー、お前のことはデキの悪い弟としか見れなかったから、ちょうどよかったな。わちはもっといい男をすぐ見つけるからなー！』

……と。

今思えば、明らかかな失策だった。

まさかこんなにも早くチャンスがやってくるなど、想

像もしていなかったのである。

（だから、リユートから言ってくるならまだしも、わちからは好きだとか言えなくなってしまった……）

もし、あのときのセリフがただの強がりで、本当は好きでしたなどと口にしてしまえば、二度と隆人に頭が上がりなくなる。

今まで年下の幼馴染みということだからかってこられたのに、自分が弟の下についてしまうことになる。

『——くらら。お前ほんとは俺のことが好きで好きで仕方がなかったんだな……。よしよし、素直に言えて偉いぞ。今までちつとも気づいてやれなくてゴメンな。お詫^わびにこのプリン食っていいぞ?』

『ぬわああああー！ 子供扱あつかいすんなああああ
……！』

二チャツとした笑みでくらの頭をナデナデする隆人の顔を想像すると、顔から炎が噴き出る。

そんな状況には耐えられないのが、舞咲くらのという少女であつた。

その現実気づいたときはベッドに顔を埋めて悶絶したものだ、持ち前の明るさですぐに気を取り直した。

恋人と別れた直後——それも一方的にフラれた隆人への好感度を上げるには、今が絶好のチャンスである。

そもそも、親しい友人関係が長期間成り立っている時点で脈はあるはずだからだ。

（それに、今日のわちはそれだけじゃないぞ……！　リ
ユートのヤツを落とすために、決定的な策を用意してる
からな）

キラリと隆人に背を向けたまま目を光らせ、くららは
己^{おの}が秘策を決行した。

「ところでリユート。明日の日曜日は空いてんのか？」
「うっ……。なんだよいきなり？　……予定はあるぞ。

中学時代の連中とな」

「なんだ。日曜はヒマだから、わちがつき合ってやろう
かと思っただのになー」

たいして落胆した様子も見せず、くららはわざとらしく
肩をすくめる。

くららは生徒会長から直接聞いて、知っていたのだ。隆人が新しくできた恋人を、明後日のプチ同窓会に連れて行くと言っていたことを。

突然別れることになったために、隆人が困っていれば、助けになれる。

（くくく……。どうせ即興で恋人役を務めてくれる知り合いなんて、わちしかおるまい。たとえ演技だろうと、わちを恋人扱いすれば態度も変わるだろ）

古くから——擬似的な恋愛関係が本物へ発展した例は枚挙に暇がない（レディコミ調べ）と聞く。

更に今回の窮地を救われれば、くららに敬愛の意志を向けるようになるだろう。

（まさに完璧な作戦だな！ あとはリユートが素直に、
わちに好きだと言えりような雰囲気を整えてやるだけ
だ）

ふふん、とくららは胸を張り、意味深な視線を向ける。
それに対する隆人の心境は――。



（――うおおおお、マジでどうしようー！）

内心、隆人は結構揺れていた。

くららに恋人の代わりを頼むのか、白雪に頼むのか
――どちらもマウントを取られそうで嫌だが、白雪より

はくららの方が頼みやすい。

しかしその場合、生徒会長からフラれた事実をどう伝えるかがネックである。

めちやくちや威張ってしまっただけに、反撃が怖いのだ。

（くそ、もう少しマイルドに勝ち誇っておけばよかった……！ 普段からくららがウザ絡んでくるから、つい調子に乗ってしまった……！）

「ところでリュート。ちよつと変な噂を聞いたんだけどな」

再び隆人の漫画雑誌を開きながら、くららはベッドの上に戻り込む。

膝ひざを立てて体育座りをしているので、またパンツが見えそうである。わざとやってんのかコイツはと隆人は一瞬思うが、たぶん素で気づいてない。

角度的に真横だからギリギリで見えないが、そのオーバーニーツックスに包まれたムチムチふとももだけでもかなりの破壊力がある。

性格が子供っぽいし、いつもからかってくるからエロい雰囲気にはならないのだが、やはり外見だけは文句なしに可愛いのである。

死んでも言いたくないが——、つき合えたらいいか
もと思ってしまえるほどに。

「なんだよ、噂って」

「生徒会長が海外留学することになったらしいから、遠距離恋愛は嫌だつて心変わりしたとかな」

「ッ……!?」

その一言で、既に知られていると確信した隆人は身構えしたが、

「あの女も気紛れだからな、そーいうのにリユートが振り回されたんなら、かわいそーだと思つてな」

くらははからかうような口調ではなく、目を合わせずしみじみとそう言ってくる。

「ま、わちが今後男を選ぶとしたら、そーいう身勝手じゃないヤツを捜したいとこだ」

「……」

そのどことなく悟ったような表情と態度を見て、隆人の気が変わる。

『フラれた者への同情』と、『自分は今男がいないアピール』。

更には、『隆人の心境の同意』をさりげなく——などと思っっているのは当人だけで、割と露骨にくららは示していた。

一晩かけて考えたにしてはわざとらし過ぎる誘いだつたが、藁わらにも縋すがりたい今の隆人に、はこれ以上なく頼もしく映った。

（こいつ。たまーにだが、年上らしく優しいときがあるんだよな……）

なんだかんだ言っつて、隆人が本気で困っているときは、
□でこそふざけたりしているが、力を貸してくれる。
そうでなければいくら幼馴染みとはいえ、関係は長続
きしない。

隆人にとって騒がしいが居心地がよく、自分を飾る必
要がない相手なのがくららなのだ。

そう考えると、傷心の痛みが消え、甘酸っぱい疼うずきが
胸の中に湧き上がった。

（もしかしてコイツ——俺の事情を察しつつ、つき合
たいと思っっているのでは!?）

隆人は自分がやや錯乱していることを自覚しながらも、
甘い夢に逃げてしまいたいと願っている。

迷った末、自分の母親が仕事から帰ってくる前に、意を決して告白した。

「——実は、お前も気づいてるようだが、その通りだ」と、生徒会長とは別れたことを切り出す。

「ふーん、そっか。やっぱ別れてたのか。残念だったな。でも、日曜日の集まりでヤケ酒は呑むなよ？ 補導されちまうからなー」

ベッドの上で、くららはあっけらかんとした口調で言ってくる。

その砕けた態度が、隆人の救いとなって行動を後押しした。

「わかってる。それより——ちよつと面倒なことがある

って、日曜にある中学時代の連中の集まりに恋人を連れて行く予定が……」

隆人はこの場を取り繕いつつ、さりげなく探りを入れる。

ここまでは、八割がたくららに頼む方向で、隆人の考えはまとまっていたが――。

「それで!? このわちにひと肌脱いでほしいとな? ま、まあほかでもない弟分のリユートが言うなら、手伝ってやっても――」

隆人がそう言いかけている途中で、くららがすかさず雑誌を放り出す。

それを見た隆人ははっと我に返った。

「言っつてねえよまだなににも！　なんでめちやくちや食い気味なんだよ!?」

「はっ……!?　な、なんでもないぞ！　遠慮なく話を続けてくれ！」

「今のを聞いて続ける気になると思うか!?　このポンコツ十七歳児が！」

そんなやりとりをしたあと、気まずい沈黙が辺りを満たす。

バツ悪げに目をそらして口笛を吹くくららを見て、隆人は若干顔を引きつらせる。

（コイツ……。俺の事情を知ってやがったな……。！）
ならば今の一連の流れは、隆人に大きな貸しを作るた

めの策略である可能性が高い。

一方で、くららは『恋人役を引き受けるともりがあ
る』という裏付けがとれた。

そのおかげで妥協案が脳内に浮かぶ。

ある意味、これ以上調子に乗られることはないと割り
切ればアリだろうか？

くららは再び広げた漫画雑誌で顔を隠しつつ、かすか
に頬ほおを赤らめつつチラチラ視線を送ってきていることだ
し――。

（なら、頼んでみるとするか……）

隆人は目を閉じ、軽く深呼吸をする。

そして、ベッドに腰かけて隆人を見上げるくららの姿

を改めて見て——。

「……やっぱやめた」

「なんでだよ——!!」

くららが漫画雑誌を放り投げて叫ぶ。

もう完全に、自分が選ばれる気でいたらしい。

隆人も数秒前まではそう思ったが、キツイと判断した。

今までは、誤魔化^{ごまか}しのために恋人役の代わりがほしい

という状況が優先だったが、現実的に考えた瞬間、無理

だと思ったのだ。

「よく考えたら、連中には大人びた雰囲気^{きずな}の彼女って言

っちゃってるし」

「年上だろーがよー！」

わちはあああ！

今年で高校三

年生だぞおお！」

両手を上げ、全身で噴火ふんかの如き怒りごとを表現するくらら。その可愛さは認めるが、そういうところが子供っぽいのだ。

「いや、くら姉は見た目は中学生……。下手をすると小学生だし……」

「ざけんなー！ んなわけあるかー！ 中学でちよつと背が伸びたくらいで調子乗んなよー！ てめー！」

（あ、これはヤバイ……！）

くららは完全にブチ切れモードに入ってしまった。

丸みのあるアニメ声と童顔どうがんのおかげで怖くもななともないが、今にも口から火を吐きそうなほど憤慨している。

——そう。くららは子供扱いされるのを非常に嫌うのである。

年下から言われると更に二倍は怒る。

昔からそのことで周囲にからかわれているせいか、本人は気にしているようだ。

中学時代に背が伸びるかと思ったようだが、現実に残酷だったようで、その点はますますこじらせているのだろう。

が、隆人として簡単に折れるわけにはいかなかった。

「でもな。実際かえって疑わしく思われる可能性が

——」

最悪、近所のお子さんを連れてきたとドン引きされか

ねない。

この世には、真実を告げることでもかえって疑われることもあるのだ。

「わちを舐めんなよー！ こう見えてもまともな格好すれば大人に見えんだかなー！」

大人に見られたかったらその口調からどうにかすべきではなかろうか？

そう思わなくもなかったが、今のくららには言えなかった。

「わかった。そこまで言うなら、手伝ってくれと助かる。あと、なんていうか、つき合っただばかりってことでいいから。あんまり恋人として特別な感じは出さなくて

いいぞ」

「お、そっか……。じゃ、じゃあ、わちがリユートの恋人ってことで、いいんだな？」

隆人が認めると、くららはかすかに頬を赤らめて目をそらす。

その仕草だけ見ると、十分過ぎるほど可愛い。

思わず見惚れてしまうほどに。

「まー、当日のカッコはちゃんと大人っぽくしてやっから、大船に乗ったつもりでいろよ」

ニコツと屈託のない表情でくららは笑う。

そして、予想より調子に乗られなかったことも好印象だ。

なんだか、なし崩し的にこんな状況になってしまったが——。

（まあ、思ったより前向きに協力してくれるみたいだし、悪くないかもな……）

ふふん、と。どこか誇らしげにデカイ胸を張っているくららを見て、隆人は思う。

やはり正面切って言いたくはないが、本当に恋人になってもいいなと感じられるほどに——。

（つてなにを考えてるんだ俺は……）

節操せつそうのなさ*に*我ながら呆れる。

そういつた甘い考えで生徒会長とつき合い、後悔したばかりだというのに。

（だいたい、くららの方も俺のことなんて異性として意識しちやいないだろうし。都合のいい妄想も大概にしろってことだな）

隆人の思考は別におかしいわけではない。

この世界にすれ違いが生じるのは、人の心が覗^{のぞ}けぬ故^{ゆえ}の必然だ。

「じゃ、よろしく頼むぞ。待ち合わせの時間とかはメールで送るから」

「当日はくらら先輩と呼べよー？ 昔みたく『くら姉』でもいいけどな？」

「いきなり演技が破綻してるじゃねえか!? 最近つき合っただばかりの恋人設定って言っただろ!？」

やっぱり不安になつてきたが、今更後には引けない。
自信満々のくららをやや不安に思いながら見送り、プ
チ同窓会という名の合コンに備えることにした。



「お嬢様。そろそろ私は帰宅しようと思いましたが、いつ
までスマホを凝視ぎようししているんですか？」

——その頃。

月ノ瀬家、白雪の自室にて。

年下の侍女である日隠華音が、ベッド上で固まったま
まの白雪に声をかけた。

「あれ？　なんでだろ……。おかしいですね。メールが、こないんです。そろそろ送ってくると思うんですが——」

「自分から連絡すればいいじゃないですか。そこまで気になるのでしたら」

半目の侍女は、至極当然の指摘をする。

「……はっ!?　冗談も休み休み言ってください。何故わたしが自分からあしみや芦宮先輩の恋人代わりを務めるなどという面倒な役を買って出なければならぬんですか？　客観的に見ておかしいでしょう」

「ええ、確かにおかしいです。あなたの様子が」
華音の声は普段以上に虚無である。

「そうですね。おかしいんですよ、先輩がそんなことをお願いできてる人がわたし以外にいるはずなのに——」

「……………」

話がかみ合っていない。

白雪が重症だと悟った華音は、そそくさと帰り支度を始める。

「どうでもいいですが、原稿の締め切りが近いのでありませんでしたか？ いえ、わたしは別段口を挟むつもりはないのですが」

「わかっていますよ。すぐやります」

そう言うと白雪は自分の机に向かい、ノートパソコン

を開く。

しばらくキーを無言でタイプをしては、一分おきにベツド側のサイドチェスト上のスマホへと視線を向ける。生徒会長の代わりにを務めようとしていた白雪は、舞咲くららという伏兵によつて、完全に出し抜かれていたのだ。「はあ。困ったご主人ですね。本当に……」華音はやれやれと呆れつつも、ギリギリまで白雪のことを見守ったのだった。



「ふっふっふ。さすがはわちだな。これで当日いい感じに

決めさえすれば、リユートのヤツもわちを見直すだろー」
自宅へ戻ったくららは、作戦を成功させたことで興奮
を隠せずにいた。

自分のベッドに寝転び、天井を眺め^{なが}ながら日曜日の行
動をシミュレートする。

その手には、『カレシができたときのレクチャー』と
いういかにもな本が握られていた。

第一目標としては、恋人の代わりをつつがなく果たす
ことだが、くららとしてはただ『役割』だけに甘んじる
つもりはない。

「この機会を逃す手はないな。せつかくだからわちを恋
人にしたときにどんな気分になれるか、しつかりと教え

てやらんとなー」

くららの方からの告白は不可能でも、隆人から言ってくる分には問題ない。

だから、本当に恋人になれたらこれくらい嬉しい！
と、思わせる必要があるのだ。

が、くららは気づいていなかった。

今まで自らの恋心にすら気づいていなかった自分の『非』恋愛脳——恋愛力の低さに。
そして、あつという間に当日がやってきた。

「試読版くらら編」はここまで。続きは3月15日発売の本編でお楽しみください。

※試読版に調整を加えておりますので、本編とは異なる点がございます。あらかじめご了承ください。